

NORTH・SOUTH・EAST・WEST MEET FOR

開発のための話し合い



パート III

a dialogue on development part III

地球の明日の在り方、特に開発途上国の将来を考えるMRA国際会議「開発のための話し合い」が新春1月5日から一週間、インドのマハラシュトラ州にあるパンチガーニのMRAセンター・アジアプラトーにて開催された。今回で3回目となるこの会議には、インド国内及び共催国の日本をはじめ世界26ヶ国から250名の参加を得た。日本からは国際MRA日本協会高瀬正二会長御夫妻、相馬雪香副会長、外務省派遣の吉田喜久夫駐ボンベイ総領事、世界経済調査会派遣の加藤義喜日大教授、同青木一能助教授、聖母病院院長戸田慶一郎、二子ノ茨城星亀作各氏の他、会議の準備期間から加わり裏方役を務めた4人の青年などを合わせて15名という多彩な顔ぶれの参加であった。

インド駐在のスリランカ大使、バングラディッシュ大使のほか西ドイツやエジプトの参事官も参加しパンチガーニならではの卒直な対話に積極的に加わっていた。

通常国際会議では自国の立場のみが表明されがちだが、相馬雪香さんの「この地球で最も宝とする資源は地下にあるのではなく、地上に存在する人間そのものである」という開会の言葉に表わされるように、ここでは人間個人としての共通の資質に基づいた正直な話し合いがなされた。

インド特集号

開発のための話し合い ————— パート III

1983年1月5日～11日

パンチガーニ

インド

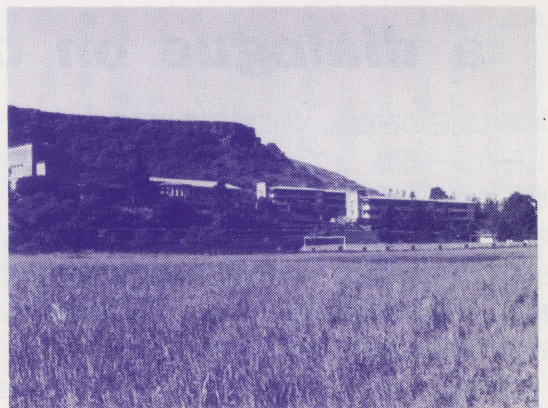


会議では“4つの絶対標準”に基づく個人のチェンジの体験談や、世界の色々な宗教の伝統を分かちあう国際色豊かな祈禱会、本会議に続いての少人数のグループディスカッション、セミナー等多彩なプログラムが展開された。このあと海外代表はジャムシェドプールでの会議（15日～19日）とニューデリーでのキャンペーン（22日～28日）へと向かい、各地で多くの成果をあげた。

日本からの参加者を代表して戸田先生、青木先生そして大木浩史さんに報告をして頂いた。

私がMRAの存在を知ったのは、一九八〇年のヨーロッパ旅行の途上のことであった。その旅行はスコットランドの名門ゴルフ場、セントアンドリュース・オールドコースへの表敬訪問が目的であったが、その時の団長が現MRA日本会長の高瀬正二氏であったのである。

(一) 序



MRA パンチガーニへの道

戸田慶一郎

出来たのだった。氏の献身的で、且つあたたかみで人を惹きつけずにはいられない人柄は、旅人であった私達の心に深く残り、そしてその時にMRAの名前をも知ったのであった。

その翌年、日本でのMRA会議開催の際に、イエントウさんが来日されるとのこと、旅行のメンバーは高瀬会長に伴われて会場の箱根へ出かけて行った。

一年ぶりにお逢いしたイエントウさんはノルウェーで受けた印象のままの温和な笑顔を湛えて、再会を喜んで下さった。

M R A の趣旨・理念などに対して全くの無知という私であったが、会議の末席に坐って討議を聴いたり、夜のガーデンパーティで世界各国から出席された方々と、肌で触れ合う和やかな時を過ごしているうちに、我々は人種、国の違いに関係なく地球の上に住み、平和を願う一つの運命共同体である」というテーマが、おぼろげながら理解出来たような気がして来た。或るミーティングで、自分の職業柄世界の人口問題に触れて、特にインドのそれについて話したことを思い出す。

以上の経過を経て、高瀬氏の日本会長就任を機に、私も会員とさせて戴いたという全くのフレッシュマンなのである。

一九八三年の会議はインドのパンチガニーで開かれるということで、高瀬会長からお誘いを受け、同行させていただくこととした。

一月三日の午後成田を出発した一行は、会長と会長夫人、相馬雪香先生と私、それに添乗員の五名であった。

会長御夫妻とは以前からのお付き合いで、そのお人柄を深く尊敬し全幅の信頼を捧げているの

であるが、相馬先生は初対面であったのでいささか緊張してしまった。このか弱いお体でインドまで出かけられて、しかも次の用件で早々と帰国なさるといふその忙しい旅程が案じられたのであったが、それは全くの杞憂であることを思い知らされたのである。高瀬会長から先生の生い立ちから現在の御活躍の概略を伺い、直接にその御人格に触れて行くうちに私はすっかり心打たれてしまった。もうお若いとは言えないお年で、このか細い体の何処にそのような強いファイトが隠されているのだろうか、実に偉大な女性であることに畏敬の念を抱き、このような立派な女性が日本の代表として、世界各国を飛び歩いていて下さることを感謝し、誇りをも感じたのである。

(二) パンチガニー

アジアプラトールへ

元旦三日の冬空へ飛び立った我々は香港給油の後、四日の夜明け前にボンベイに着いた。ボンベイは夏の気温で、その暑さと埃っぽさは予想していたと言え、はるばると来たという感慨を覚えずにはいられなかった。

ボンベイで一泊して翌朝、M R A ハウスでの朝食会に招かれ、各国の代表の方々と同席して親しく懇談する機会を得た。この日はパンチガニーに向う予定だったので、名残りを惜しみつつ、この席を設けて下さったインド

M R A の方々に感謝しつつ車中の人となったのであるが、山や谷を越えての三時間の行程は、快適なドライブに慣れている私達には身にこたえる難行であった。車には冷房はなく乾期で土埃の舞い上る道は舗装はされて

いるがデコボコの悪路で、一行五人を詰め込んだ車はガタガタと揺れながらクラクションをけたたましく鳴らして疾走する。さながらサファリラリーの如きである。クラクションを鳴らしておけば、もし人身事故をおこした場合でも車に責任はないのだとあとから聞いて、国が変わればその定めもずい分とのどかになるものだと感心したものであった。

途中の窓外の眺めはさすがに

ここはインドであるという感興を湧かせるもので、山も畑も、地層と植物の関係について、の標本のように興味深く眺められた。山々は起伏に関係なく同じ高さ

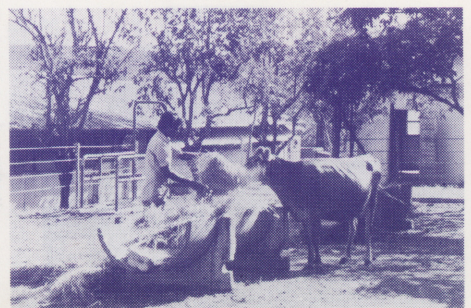
で水平に地層が区切られていて木の繁りが少ないので白や赤の地層がむき出しに見え、それぞれの層毎に生えている木が異っているのが珍しかった。

道の両側には一〇メートルもあろうかと思われる大木が並んで長い気根を垂れていたが、この種の樹の根元で釈迦牟尼は悟りを開かれたと言ふことであつた。菩提樹であろうか。

こうして目的のパンチガニーに着いた時は、疲労困憊していたが、標高一三〇〇メートルの高地にあるこの地の肌に心地よい気温、きれいな空気や緑濃い樹陰などオアシスさながらの自然の中に立つと生き返るような気がした。この奥に富豪の持つ別荘地帯があるというのも領けられたのである。

曾つて老ガンジーが立ったと言われるテーブルランドの岩壁を背にした、この快適なパンチガニーの丘に建つM R A アジアプラトールで私達は五日間を過ごした。

食事毎に新しいメンバーでテーブルを囲み、会食をしながらの楽しい語らいは、人々のあたたかい心に触れて忘れられない思い出となった。



ここで同室になった加藤先生とその友人の青木先生の、プライベートタイムの若き学究の論戦は、M R A 本会議の討議に勝るとも劣らないものと私には思えた。このような若いエネルギー、イデオロギーが次の世界を担うことに、大きな希望を感じずにはいられなかったのである。

(三) 未来

パンチガニーM R A 本部は、まさにインドに於けるパラダイスである。しかもそれが人の手によって造られた、人工のパラダイスなのである。地下一〇〇メートルに水槽を造り、これを農場の灌漑用水に当てているため、乾期であるにもかかわらず

ず畑は青々として、私が見た範圍のインド各地でごく一部を除いては、見ることの出来ない光景であった。全てが自給自足であり、衛生面では特にきびしく留意しているとのこと。先進国に劣らぬ技術の導入である。

この農場を眼下に眺めながら高瀬会長と語り合った。

「インド全体がこのように変革されればすばらしいことである。日本の力を以ってすればインドを農業国に変えることは可能なのではないか」という意味のことを話すと、会長は、

「お互いに余っているものを他国に提供すれば、まだまだ洋々たるものがある」と答えられ、私は理想と現実との距離の余りにも隔絶していることに思いが辿り着くまで、頭の中にさまざまにインド発展の夢が去来した。

単純に「日本の力があれば」と言ってしまったが、複雑な国内事情があるのは当然のことである。一旅行者の目にも「貧困」の印象が深い国であるが、政府自体の努力にかかわらず現状はかくの如しなのである。うことは想像に難くはない。

ただ旅行者として、この貧し

い人達に少しでも繁栄を……願う気持ちから、感じたことを言わせていた。だとすれば、我が国が戦後の廃虚から今日の日本に立ち直れた秘訣は、国民全般が

一様の権利義務を有し、教育程度が高く、何よりも国民が勤勉であったからであると考えられる。それを裏返してこの国に当てはめて、政治、教育のあり方、人口問題、苛酷な階級制度など、

インド人自らの口からも聞かれた言葉をも重ね合せてみると、インドの前途は私にはやや悲觀的にさえなっているのである。

しかしMRA本部や、僅かに見られた灌漑が成されて青い作物が見られた畑、またはタジマハールに向う道の両側に一大工場団地が開かれんとしていることなど、変わりつつあるインドの小さな足跡を見ることで、明日への希望を持つことは不可能ではない。莫大な天然資源を秘め、人的資源にも恵まれている国である。

「やれば出来るのです」と言われた相馬先生の言葉がいつまでも私の耳の底で鳴り響いている。

インドの人達よ、やれば出来るのです。頑張ってほしいと願わずにはいられない。

(四) ニューデリー

インドの一月は乾期である。夜バスを使うと底に土が沈む程の土埃であった。

オールドデリーは、古城の周りに発展して行った古い街である。商店と言ってもバラックに看板をつけた甚だみずばらしいものが多い。バラック街を歩くと、ゴミが溢れ悪臭が満ち、貧しい人々は裸で一度も水浴をしないのではないかと思わせる程に、黒い肌は白い埃をかぶって

いて、悲しみと諦めをたたえた眼をして人をみつめる。又その瘦せた腕や体の動きも旅人である私の目には哀れを誘うものがあった。

成人の男女はサンダルを履く人が多いが、幼い子供や老人の多くは裸足であった。

街角に立っていた四・五才の子供は、信号待ちをしている車に寄って来て、さっと手に持った布で車を拭き金を乞うのである。教育を受けられるのはほんの一握りの子供達だけなのであるうか。

しいたげられた者の悲しみは人ばかりではなかった。街の中や畑の道を行く水牛や駱駝・驢

馬などの黙々と歩く姿も又、ひどくもの悲しく哀れで私の心に突き刺さる。彼等の無言が無限の真実を語り尽くしているようであった。

私は殊更に貧しいものを見過ぎたのであろうか。

オールドデリーと道を挟んでニューデリーがある。この二つのデリーは極端なる貧富の差を見せ、それはさながら今だに残るインドのきびしい階級制度の象徴のようであった。

赤砂岩で建てられた大統領官邸はその偉大さを誇り、官庁街は近代的技能を集めた都市計画によって出来上った街であった。政治を司る一部の人々の権威を如何なく見せつけられていて、パンチガニーで食卓を囲んでインドの代表から聞いた腐敗した政治、一部の権力者、富者のための政治という言葉も頷けるような気がした。

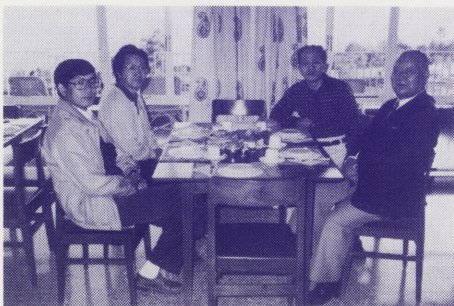
しかしニューデリーには今は私達には当然のこととなっている文明文化があり、清潔さがある。古き良き伝統を失うことは許されないが、インドのどの街からも貧困、不潔、無教育などが消えて、人々の眼に希望と明るさが宿る日が来ることを心か

ら祈らずには居られない。

これがつまり、今回のMRA会議の主要テーマなのであった。

この会を開くに当ってその勞をとって下さったインドのMRA関係の方々、パンチガニー本部でお世話になった藤田さんをはじめ日本の方々、同行の会長御夫妻、相馬先生、東芝ツーリストの小貫さんに感謝の念を捧げて筆を置くこととする。

(聖母病院院長)



●右から2人目が筆者

初めての海外生活をインドで送っています。本当に見るもの、聞くものが新しい発見で驚きの連続です。

昨年の十二月十七日にパンチガリーニのMRAセンター、アジアプラトリーに着きました。先着の日本人女性達を初め、世界各国から来ている人々、又地元インドの方々、皆間近に迫っているクリスマスや国際会議の準備に忙しいのに、大変暖かく歓迎してもらえ、とても嬉しく思いました。

私も早速、会議中の食事の材料を買うグループに参加し、お好み焼を作ったり、センターの人達と一緒に、センターの設備の点検、修理などを手伝いました。

二・三週間たったある日、会議でやる劇の「シーン」である「ジャパン・チャイナ」の、日本人医師の役をやってくれないかと頼まれました。台本を見ると、セリフが沢山あり、英語に不自由している私にとっては、とても大きな試練に思えました。セリフは全部覚えなければならぬし、発音の悪いところは直さなければなりません。セリフの一つで「だけど、悪いものは悪

日本への期待

インドMRA会議

大木浩史

いんだ」と言うべきところ、どうしても「長いものは長いんだ」となってしまう、練習中に何回笑われたかわかりません。それからセリフの意味はわかっててもどうしても体の動きとセリフがうまく、かみ合わないのです。共演のチャールズとサノの二人はとにかく一生懸命指導してくれました。悪戦苦闘しているうちに、いよいよ本番という日がやって来ました。最後のリハーサルが終わると、みな口々に、「少しぐらいセリフを間違えても、心を伝えるということが、一番大切なことから、リラククスしてやりなさい」と、はげましの言葉をかけてくれました。そのお陰で、大きなミスもなく、ス



ムーズに終わることが出来、ホッとしたことです。会議中みんなからドクターと呼ばれたり、またパンチガリーニの町の銀行へ両替に行ったときも「きみは、ジャパニーズドクターをやった人だな」と言われ、他の人よりも早くしてくれたりしました。今インドでは、日本に対して大きな期待が寄せられています。劇を通じて知り合った人や、食事のときに知り合ったインドの人ほとんどに聞かれたことですが、今年よりインドで日本製の小形乗用車が生産、販売されるということ、どんな車でもその価格・燃費・性能などはどうなのかということ、を彼らは知ら

がっていました。現在インドではアンバサダーとフィアットの二種類がありますが、その価格及維持費は一般の人々の所得と比較すると、莫大な金額になってしまうのです。

この日本製自動車や、私のようなものを通して、多くの人々に、日本のことをより良く理解してもらおうことが大切なのだと思います。

これからしばらくインドに滞在しますが、一人でも多く友達をつくり、一人でも多く、日本に対する興味を持ち、そして理解してもらおうように努力したいと思っています。(元自衛隊員)

●左から2人目が大木さん



御案内

国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連携のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際MRA会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の『心の開国』を推し進めるために活動しております。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせていただきます。

一、会費

個人特別(月額) 一万円
個人(年額) 五千元
法人(年額) 五万円

一、払込先(いずれも普通預金)

- ① 住友銀行新宿西口支店
二五九一四一八三七九
- ② 第一勧業銀行代々木支店
一六三一一〇一四三三三六
- ③ 富士銀行動坂支店
二三六〇八六二二二〇
- ④ 三井銀行池袋支店
一八一四一九八九九八
- ⑤ 三菱銀行池袋東口支店
一七三三四四五六九〇〇

国際MRA日本協会宛

開発のための話し合いに参加して



青木一能

◇人間的交流の実感

テーブル状の岩山を背にしたパンチガーニの会議場は緑と静寂に包まれ、多くの国の人々が集うに格好の場所であるように思われた。ボンベイの乾いた街並と騒音がいささか衝撃的であった私にとって、パンチガーニの静けさが余計に強く感じられたのは間違いない。

そのパンチガーニに加藤義喜日大教授と共に初めて足を踏み入れたのは、やむなく出席をとりやめられた木内信胤先生に代わって先生がパンチガーニで語られようとした「よき世界秩序とは何か」というスピーチの要点をお伝えすることであった。先生が理事長職に在る世界経済調査会で長年先生の御教示をうけてきたとはいえ、先生のスピーチをお伝えする役割はいささか荷の重い感があった。

しかし、そうした不安を強くする間もなく、我々は多彩な参加者との交流を経験することになった。そこでの交流は、木内先生からうかがっていたように、「会議」というよりは「話し合いのための集り」を通じてのものであり、まさに人間的な交流に

比重を置いたものというのが実感であった。時には食卓を囲んで、時には芝生の上で、といった具合に、パンチガーニに滞在中は常にいずれかの国の人と話し交流するといっても過言ではなかった。MRAについて事前の知識をさ程もちあわせてはいなかった私にもそれとなくMRAの目差しているものの一面が理解できたように思われた。

◇木内理論

人との交流で貴重な経験をしたことは後に触れるとして、木内先生のスピーチに関する討議についてまず紹介しておかねばならない。

活発な討議をという配慮からか先生のスピーチに関する Bridging the gap between the rich and the poor と題したセッションは七、八〇名収容のオーストラリア・ルームと称する部屋で行われ、私の見た限りでは入口にも出席者が溢れんばかりの盛会であったように思われた。インドのパラダラジャン氏の進行で、木内先生提出のペーパーを私が要約して報

告し、その後の質疑に対して主に加藤教授が応答するという形をとり、三時間を超過して熱心な討議がなされた。しかし、その熱心な討議も木内理論を熟知されている相馬雪香先生が我々の我が儘を聞いて下さって通訳の労をとっていただいたことに大きく起因していると思われる。この場を借りて相馬先生には改めてお礼を申しあげる次第である。

さて、木内先生のペーパーは「世界の経済秩序の在り方」と題するもので、昨年八月のコウにおけるスピーチと根本思想は全く同一であるといえる。ここでその要旨に細かく触れることはできないが、今後の新しい世界経済秩序の在り方についてだけに絞るならば、次の通りである。

すなわち、新しい秩序にとつてまず必要な原則は、

(一)めいめいの「国の個性」をまず第一に尊重しなければならない

(二)「強国の押付け」を注意深く見守り、めいめいの国に「最大の自由」を与えるべく、それを極力排除することである

(三)物質的な豊かさは、人間的な努力がすべてそれに向けられることがないよう、その「王座」からひきおろさねばならない、

というもので、これら三つの原則は、次の一つの原理に集約される。すなわち、

いかなる国も他国の犠牲のうえに自己の利益を得ようとしてはならない

である。このことをはっきり認めることが「世界経済の新秩序」への第一段階であり、パンチガーニにおけるグラランド・テーマである Creative change for a saner world への尊き出発点となる、というものであった。

こうした木内ペーパーに対してフロアーからは熱のこもった意見や質問が出され、セッション参加者の意識の深さを窺わせる。フロアーからの意見には、「押付け」が力の強弱にかかわらず存在することや価格操作といった間接的押付けが存在することの指摘から、国家間の貧富の問題と同時に国内のそれにもより強い注意を払うべきだとするものまで様々な意見が出された。概ねセッションは熱心な討

議の下に終了し、木内ペーパーの単なる伝達役ではあるが、私なりに胸を撫でおろした次第である。

◇ジンバヴェの友

右のセッションとそれまでの過程で私は多くの勉強をさせていただいたが、その他にもパンチガーニではこれまでにない貴重な経験をすることができた。なかでもアフリカからの参加者と親しく意見を交換する機会をも

てたのは、アフリカ研究を志す私にとって何よりの成果であった。とりわけ独立間もないジンバヴェから多数の参加者が在ったことは、私の専攻（国際政治学及びアフリカ政治論）からして同国の独立後の情勢や南部アフリカの現状を生にヒヤリングするなど、このうえもなく有意義であった。

ジンバヴェのケドモンさんはルームメイトであったこともあって、朝は空が白む頃から夜は二時過ぎまで、私の日頃の疑問点や関心を彼にぶつけ、共に議論できたのは有難かった。また、ナイジェリアのアデグビレさんとは七九年の民主選挙後のナイジェリア政治・経済情勢を

直接うかがうこともできた。同選挙をアフリカにおける民主政治の一つのモデルとして考えている私にとって、彼の話は極めて重要な示唆を与えてくれるものだった。彼とは極く最近のうちに日本での再会を約したが、いまからその日が待ち遠しい限りである。

こうした個人的関係以外ではジンバヴェと日本の参加者の間で行われた日本・ジンバヴェ関係についての特別セッションに参加させていただいたのも成果の一つであった。同セッションでは、私が日頃から抱いていた日本の南部アフリカ外交への批判点や展望を述べ、それに対する意見をうかがえたこと、さらにジンバヴェの人達が日本に対してどのような期待と要請をもっているかなどを直接知ることができた。無論、そうした期待や要請を知ること、尚一層、日本の南部アフリカ政策の現状に焦燥感を禁じ得なかったのは事実であるが、いずれにせよ、多くの機会にアフリカの人達とあるいはアフリカの諸問題に関わりをもつ人達と卒直に親しく意見を交換できたのは喜ばしい限りであり、私の関心に配慮し

てそうした機会を設けてくれた藤田さんには感謝する次第である。

以上のように、パンチガーニに出席したことで私自身得るものが極めて多かったように思われる。私自身の得た個人的成果を強調するあまり、全く私的な感想文になってしまった。しかし言うまでもなく、世界から多くの人が集い、数日間、行動をともにして人間的交流を深めていくことは極めて重要なことである。パンチガーニに出席していま思うことは、山積する世界の諸問題の解決も結局はそうした人間のレベルからの交流のなかで地道ではあるが、その糸口を見出していくのではないかという点である。私自身にとっては少なくともパンチガーニに出席することで得た経験が今後の自己の在り方に何らかの影響をもち得ると考えている。

最後に、そうした機会を与えてくださった木内先生には深く感謝していることを記しておきたい。
(日本大学助教授)

アメリカMRA国際会議のお知らせ

アメリカMRA国際会議が5月13日から5月15日にかけてオレゴン州ポートランドで開催される。

「あるべき未来に向けて」というテーマのもと、

1. 国際論争の場でいつも障害となる“相手を責める態度”の変革、
2. 社会を構成する多様な背景を持つ人々がお互いを高め合う方法、
3. 平和や和解の心を育くむ家庭の創造、
4. 恐れに立ち向かう勇気と対立に代わる調和の精神を導く信仰の発見、
5. 世界の責任を担う指導者群に正しい展望と支援を与える国際チームワーク、

といった5つの観点から対話がくりひろげられる。

美しい景観で知られる西海岸の都市ポートランドは日本との貿易高が第1位。しかもそれは他のアメリカ全州との貿易高の合計をも上回るといわれるほど日本とは“切っても切れない仲”である。

オレゴン州アティヤー知事とポートランド市アイバンシー市長も招待状に歓迎のメッセージを載せているほか、商工会議所、ロータリークラブ、地元民放テレビ局など地元総出の準備体制が整っている。

日本からの参加が強く望まれている。

AN INTERNATIONAL CONFERENCE
FOR MORAL RE-ARMAMENT

TOWARDS
THE
FUTURE
WE
LONG FOR

MAY 13-15, 1983

Holiday Inn, International Airport
Portland, Oregon, USA

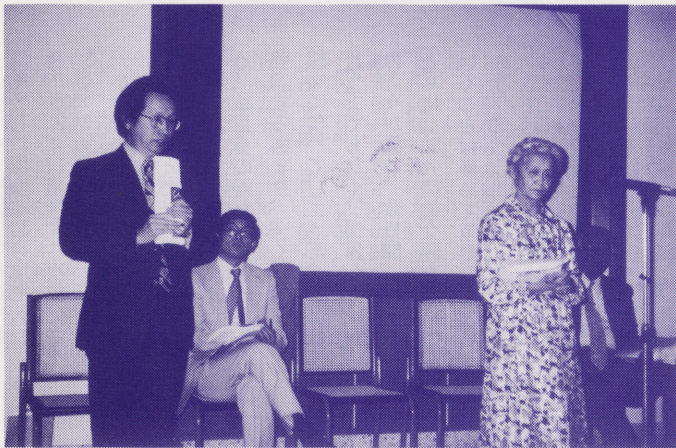


Every month some new crisis lays bare more of the fragility of our economic condition and the dangers to world peace. How can we recapture the spirit of leadership and faith that will answer our fears and demonstrate that even the most intractable problems become solvable once we let God direct us and deal with the kernel of corruption in ourselves.

A. R. K. MACKENZIE, former British Ambassador, recently working with the Brandt Commission



●アフリカの苦悩、闘い、希望はアジアに多くの教訓を与えた。左からモンティ・ジエール(シンバブエ)、V・キスタサミ(南アフリカ)、ジュリアス・サエンジャ(ケニア)。



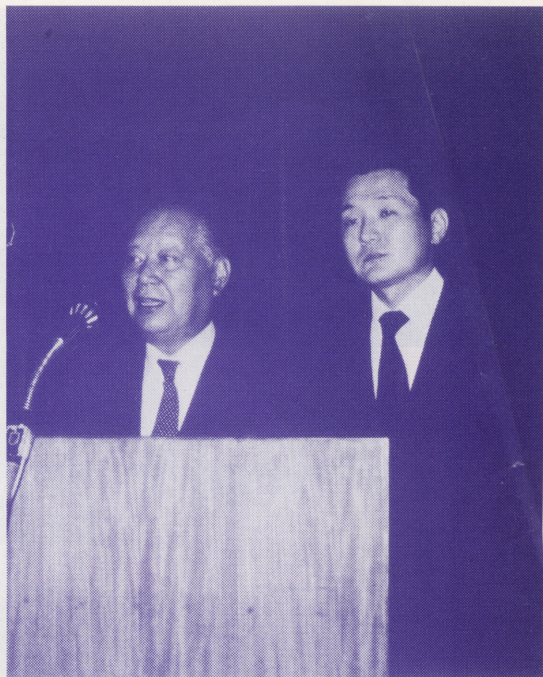
ダイアログ・オン デベロップメント パートⅢより

●“木内ペーパー”についての特別セミナーで、木内理論に対する多様な質問に、丁寧にこまかく答えて応答する加藤義喜日大教授。

●会議の基調を作った、左からルーシー・ララ(ジャーマン・スト・インド)、相馬雪香、A・K・カンドカー(バングラデッシュ)大使、アラン・グリフィス(豪州元首相特別補佐官)、ポール・キャンベル(医師・カナダ)、サンデー・アデクビレ(ナイジェリア・教育監察官)の各氏。



●開会式で挨拶する高瀬会長。



●相馬さんにチベットの現状と歴史を語るローディ・ゲリー氏。宗教的にも人種的にも日本とチベットの間には多くの共通点がある。

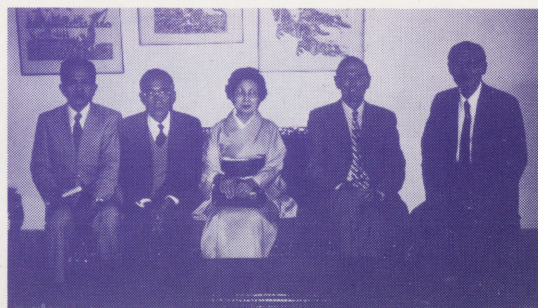


●会議を盛り上げた国際コーラスグループ。日本の青年達も参加している。

●日本風の夕食会でラジモハン・ガンジー夫妻をもてなす高瀬夫妻。



●外務省より派遣された吉田ボンベイ総領事（左から2人目）、高瀬夫人・ジョン・フェーバー英国MRA理事長（右から2人目）。





インド最大の企業グループの 産業哲学

藤田 幸久

ジャムシエドジ・ターターの大きいビジョン

カルカッタから約四時間「スチール・エクスプレス」という急行でジャムシエドプールに着く。人口約六十万のこの都市は国内最大手の鉄鋼会社やトラック会社などをはじめとするターターグループの本拠地である。

先に訪れたカルカッタの混雑とは対照的な街並みにまず驚く。広い舗装道路が整然と伸び、住宅もゆったりとしかも緑に恵まれたものが多い。

さらにここでは近代的な病院・学校・スポーツ施設・西欧風の公園、そして野外劇場までが労働者の福利厚生施設として完備している。

グループの創始者ジャムシエドジ・ターターは一八七四年に始めた繊維工場経営から身を起した。やがて彼は、イギリス植民地下の祖国を飢えと無知から救うには、インド人自身の手による産業育成しかないという確信を得る。まずインド最初の技術研究所や水力発電を手がけたあと、産業の背骨ともいべき製鉄所をここに一九〇七年に築く。「インド人に鉄が造れる筈がない」というイギリス人たちが

の嘲笑には外国からの最新技術導入で答えた。また一九二九年の大恐慌など数々の危機も、経営者の血のじむような努力とガンジーやネルーをはじめとする愛国的指導者による支援などで乗り越えてきた。

グループは現在この他にも電気・コンピュータ・エレクトロニクス・石油・ホテル・航空・化学・出版・保険・セメントなど三十二の会社を擁する。

しかし私が驚いたのはその規模だけではなく、ターターグループのビジョン、先見性、そしてその産業哲学であった。

つまり——産業とは国の富を形成し雇用を創出するものであり、利益は国民に還元されるべきである。同時に産業は社会に貢献する人造りを担う——という考え方である。

ターター鉄鋼会社がいかに人を優先しているかは、次の実績を見てもらえばわかる。

- 一九二二年 一日八時間労働
- 一九一五年 医療費無料
- 一九一七年 従業員子女用学
- 一九一九年 苦情処理労働委

員会の設立

- 一九二〇年 有給休暇
- 一九三七年 選択停年制
- 一九七九年 通勤時事故への補償

この会社では過去五十年間に亘って労働争議はない。そればかりか数年前にガンジー首相が国有化をほのめかした時、ゴパール委員長の率いるターター労働組は即座に首相宛に電報を打ち、国有化は国に対しても労働者に対しても害を及ぼすとして国有化を阻止した。

現在ターターの株・財産・利益は慈善を目的とした幾つかのターター信託基金の所有となり、これらがターター各社の経営を引き受けている。各社の利益が自動的に社会開発に投入できるしくみというわけである。

例えばターターがジャムシエドプール近郊で現在最も力を入れているのが農村開発計画である。約百キロ以内にある百五十の村落を対象として農業・工芸・園芸・家畜等のプロジェクトを村の人々の生活様式やインシァティブを尊重しながら推進している。これと並行して家族計画の指導や未亡人救済といったきめ細かな動きもしている。

社会主義経済を標榜しながら実際の社会保障はほとんど存在しないインド、貧困と飢えといった大海の中で一隅を照らすにとどまらず、ターターのビジョンは多くの村に灯をともし灯台のようであった。社会に最も必要とされる変革を産業が担うということを教えてくれた気がする。

産業立国として成功した日本が、その力を世界が現在最も必要とする変革のために使っていないかならばならないという大きなチャレンジを感じて日本に帰ってきた。

■ 忍耐心と寛容心の啓発 ■

—— ダライ・ラマとの会見 ——



一月二十三日チベットのダライ・ラマは約五十名のMRA国際代表をニューデリーのホテルに迎え約一時間懇談した。

「二十四年間にわたる亡命生活は私の精神修養に多くのものをもたらしてくれました。それは忍耐心と寛容心とです。忍耐心を学ぶには自分に敵対する存在が不可欠です。もし私に亡命生活を通しての苦勞が与えられなかったならば、私はまるで今とは違った平凡なダライ・ラマになっていたと思います。対立する関係を乗り越え許し合うことが世界の最も緊急な課題です。これは仏教に限らず他の宗教圏の世界にも及ぶべきことであり、そうした和解の動きになうMRAの活動に大きな期待を寄せています。」

と彼は微笑を絶やさず優しく語りかけた。

二十八年前インドに着いたダライ・ラマを翌日訪ねて以来の長いつきあいをもつインドのマトゥアー氏はパンチガーニ・ジャムシエドプール・デリーと続

いた国際会議の報告をした。ダライ・ラマはインドでのMRA国際会議にはいつも代表を送ってこられる。今回パンチガーニの会議に参加したローディ・ゲリー氏は「我々チベットにとって許すということは永遠の戦いです。これは試験のように一回パスすれば済むといったものではなく、毎回毎回パスし続けなければならない。試験のように頭でパスするのではなく心で体験せねばならぬ戦いだからです。」と語った。

彼はニュー・デリーのチベットセンターに国際代表を招きチベットの映画を上映してくれた。雪の中峰から峰へと黙々と歩むチベット難民の姿には心をえぐるような深い悲しみがにじみ出ていた。インドシナやアフガニスタンの難民のような死の淵をさまよった臨場感こそないとはいえ、大国間の政治力学の谷間を歩んだ少数民族としての悲劇の重みはより痛々しく感じられた。

ダライ・ラマの話のあとマレーシア人華僑のチャールス・ウェイ氏が中国民族がチベットに対して行った行為について涙ながらに謝罪した。ダライ・ラマは

温くそれを受け止め彼を抱きかかえた。

和解のメッセージを持つジンバウエやケニアの代表の話にも彼はうなづくように聞き入っていた。苦境の中でその精神生活を磨き上げ、より高い境地に達した指導者の力強さと余裕に直接触れたような気がした。



● MRA会議出席者と

インドのにおい

神々の国で考えたこと②

大沢正行

◇ボンベイを発つ

十月十三日、朝。ニケトウ・イラルー氏に見送られ、ボンベイのビクトリア駅から列車に乗った。

朝食時に彼が作ってくれたサンドイッチをほおぼりながら窓外の景色をみる。窓には危険防止のため鉄格子がはめられている。

赤茶けた大地に、ときおり灌木が見える。その上には限りない青空が広がっていた。

列車が駅につくたびに人の出入りがはげしくなる。やかんとカップのはいったバケツをぶら下げた若い青年が、「チャイ・チャイ・チャイ」と叫びながら列車の中を忙しくかけまわる。一杯50パイサ(約15円)の紅茶売

りである。その浅黒い肌にはキラキラと光る汗が彼の生命力の強さを現わしているようだ。

太陽の強さが日本とは相当違う。そういうえば、日本にあっては異様にみえるであろう原色の赤や黄色のサリーをまとった女性のみならず美しく見える。

となりの席の紳士がもの売りから何か買っている。

「何ですか。その食べ物は？」

「これは……です。一つどうですか」

ボンベイの大学の先生をしているというグプタ氏は、インドのことなら何でも興味津々と知りたがる変な日本人にいろいろなことをしやべり出した。こじきには金をやるな、荷物から離れるな、生水は飲むな、等々。最後には彼の住所まで教えてくれた。矢つぎ早に出てくることをばを理解するのにいささか疲れたころブナに着いた。

友人の出迎えをうけ無事にバスに乗ることが出来た。とはいっても、私他には外国人のいない車内を見ていささか緊張した。

大きな旅行カバンにシヨルダールバッグをかかえ、黄色い肌をした変な男が席を陣取っている

姿は、周りのインドの乗客の目には、さぞかしめずらしく映ったことだろう。

バスは、列車の中からみえた黄土の中をひたすら走る。インドの大地がいよいよ身近になった気がしてくる。あのインド特有のにおいとともに、砂けむりがようしやなく顔面をおそう。そしてたまらなく熱い。何もかもがインドを感じさせてくれる。

一時間ほどしてバスは止まった。

「チキ・チキ・チキ」

物売りの声がする。そこは停留所だった。

「カクリ・カクリ・カクリ」

小気味よい声が次々に聞こえてくる。チキは、インド風雷おこしのたぐい。カクリはきゅうりのことだった。その軽快なテンポにはつい買ってみたくなるリズム感がある。ことに、車内の少年たちが、ときおりこちらを気にしながら、ピーナッツを口にいかにもうまそうにほうりこんでいるのを見るともうがまんでできない。私はピーナッツ売りから、バナナを薄く切って揚げて菓子を買う。少年たちは私にみている。きらきらと輝く、

澄んだ目で見つめられると、つい目を伏したくもなるのだが、彼らがピーナッツをほうげばるのをぞき込みながら、あらそってバナナ菓子を買う。砂がはいり込んで苦い口に、ほんのり甘いそれは何ともいえないうまさがあった。

バスは再び走り出した。いくつかの山を越え、細い道を疾駆する。

バナアンという木が道路沿いに植えてある。枝々から根が出て地上にまで達している。苛酷な気候の中で生き残るための処世術なのであろう。異様な風体のそれはまさしくお化けだ。

私はパンチガーニがこのバスの終点とは知らず、乗りすごしてはいけないと思い、運転手に向って何度も「パンチガーニ、パンチガーニ」とわめいた。彼は、にこにこ笑ってただうなづくだけで、いっこうにパンチガーニには着きそうになかった。あせる気持ちがだんだん起きてきた。坂がいつそう急な山にさしかかると、自分は何人知らないインドの奥地へと迷い込んで行くような気がした。

目をふと外にむけると、眼下に広がる灌木や、とうもろこし畑、やしの木、それらの間をぬう如く泥の家がしみのように見える。その光景はいかにものんびりしていた。

平原をつらぬくように川がはい、水辺では牛が水浴している。道路を舗装する工夫たちには女性も混じり、手で岩をどかし、大きなタイヤに溶かしたアスファルトを入れ、手じゃくで道にまいている。えんえんと続く道をその様にして仕上げたのだ。

身体から力がぬけていくように焦る心が消えていった。焦ってもしょうがない。あるがままを受け入れるしかないのだ。淡々と。

ふとそんな気持ちになったとき、バスは坂を登り切るところだった。何人かの人たちが降り、何人かの人たちが乗ってきた。その中に、私と同じような顔つきの青年がいた。きょんとしている私に

「ミスター・オオサワ」

「はい」

「私はチャールス・ウイといえます。あなたを迎えにきました」

「ありがとう」

私のなかに軽い疲労感がわき起った。(続く)

今も降り続く黄色い雨

「忘れられた国」ラオスの山岳民族モン（メオ）族の指導者バン・パオ將軍が来日した。將軍のかつて率いたモン族兵士による第二陸軍はベトナム戦争中果敢な戦いをくり広げ北ベトナム軍をも寄せつけなかった。一九七五年に共産化されたあとベトナムの傀儡政権に抵抗するモン族に手を焼く共産軍は「黄色い雨」とよばれる化学兵器を使用しているといわれる。



◇ラオスの現状

現在のラオスはラオス生まれのベトナム人カインソン首相が実権を握り、それを六万人のベトナム兵及びベトナム人入植者などが支えている。大量の虐殺やベトナム軍の侵入（一九七八年）といった派手な事件によって国際的に知れ渡ったカンボジアに比べ「ベトナム化」がより巧妙で素早く行なわれたラオスの現状は世界的にはほとんど知らされていない。

しかし昨年ヨーロッパ議会でラオスの問題は東南アジアの平和という全体のわくで扱われるべきであると討議され、次の三点が要求事項として決議された。

- 一、ラオス領土からの外国軍隊の撤退。
- 二、ラオスの内政に関する外国からの介入の禁止。
- 三、ラオスの国民が自分達の考えを自由かつ民主的方法によって表現できる機会が与えられること。

カンボジアの影に隠れて忘れられた国ラオスにもこうして徐々に各国からの関心が高まってきた。

◇解放戦線

一方、ラオスの自由と独立を標榜するラオス民族解放統一戦線もバン・パオ將軍その他の働きかけで結成されている。その設立指導者の中には、戦後日本からの戦争賠償の申し入れに対して、苦しむ敗戦国から賠償を取り立てるのは正しくないという寛大な政治的判断を示したいわば日本にとっての「恩人」達も数人名を連ねている。

將軍に同行した元外相チャントラシー氏（ラオス平地人）は自由と民主主義は失って初めてその価値がわかる、と述べてた。モラルの喪失が他からの介入の絶好の目標にされてしまうともつけ加えた。

今回の来日中このラオスの一行は五つの政党の指導者や人道援助機関の代表等にラオス国民の叫びを訴えた。ラオス平地人とモン族が緊密なチームワークをとって今回のようなミッションを組むこと自体がラオスの新しい歴史である。穏健だが共同行動は苦手だといわれたラオス国民も今失われたものをとりもどすべく手を携えて立ち上がり始めている。



●MRAハウスでのチャントラシー氏

ラオスのこの二つの民族間の橋渡しのきっかけはチャントラシー氏のチェンジであった。自分のまわりの問題だけにとらわれず広く他の世界にも目を向けていく時、身近な壁や違いは克服していくことができる。MRAハウスを訪れたバン・パオ將軍は、このチャントラシー氏の体験に信頼と尊敬のまなざしをもって聞き入っていた。

●（上の写真）インタビュに答えるバン・パオ將軍（中）



連載 ⑦

人と機構

イエンツ・ウィルヘルムセン

◇満足

「満足が得られない——何とかしたい何とかしたい。」とローリング、ストーンズはヒットソングの中で歌っている。

高い生活水準に甘やかされ、社会保障に守られ、芸術やメディアにもはやされようと豊かな西側の人はどんな満足をも得ることができない。

麻薬に走るものもいる。食べすぎや飲みすぎ、さらには浮気にすぎものもいる。仕事に溺れるものがある一方、できるだけ仕事をしないでテレビからあふれ出るものなら何でも受け入れて夜をすぎす人もいる。

あまりに満足を追求しすぎる故にそれが得られないのかも知れない。正しい価値を生きる時

に副産物として満足が得られるということをお我々は忘れてしまった。

幸せな国家への古い処方箋はパンとサーカスであった。我々の指導者を含めていまだに多くの人々がそれを信じている。消費拡大のメリーゴーランドはまわり続けている。砂漠の呼込み商人は、資源は有限で肥満はためにならず他の大陸では多くの人が飢えていることを警告している。にもかかわらずすべてを豊かさを求め続けているのが大部分の人である。

豊かさ以外に生活の中身を与えてくれるものが見あたらないというのも一つの理由である。誤った価値感はその誤った指摘するだけでは治らず、それとって代わるベターなものがない。

示されなければならない。

ハーバート・マルクーズは、西歐人は自分のために建てる家に地下室も屋根裏もないいわば一元的なものになりつつあると述べている。彼の診断はノルウェーのマルクス社会人民党の創立者の一人でもある作家シグビョロン・ヘルメバックの言葉にも同じように指摘されている。「自分とは何ぞや？」ということこそ人が問いかける最も深淵な疑問である。これは実存主義的な疑問である。自分は存在するが、その生活に實際何を望むのか？

恐らく最も重要なこと以外は大変ものわがりのいいところまできている。共産主義や社会主義のまさに目的である人類の未来への責任をとうとうとするならば、こうした問題はブルジョワ達にまかしておくわけにはいかにない。

ヘルメバックは死の問題についてもっと考えねばならないと同じインタビューで語っている。「人は宇宙にも錨をおろしていなければならぬと徐々に理解するようになってきた。人間の命は現世の居所に限定されるべきではないという感じがする。」

死をいかにとらえるかは社会的に重要な意味がある。個人の生命が七十年にすぎないとすると千年も続く国や国家の方がはるかに重要だと結論しかねない、とC・S・ルイスは指摘する。

こうした問題をおさえこむことは我々の人間性を切断するようなものである。「小さいことは美しい」の中でシューマッハは全人的人間の必要性について次のように言っている。「『全人』は事実や理論に関して細かい知識はもたないかもしれないが、核心と真に触れあっている。彼は彼の基本的な確信、つまり自分の人生の意味や目的については決して疑いをもつことはない。こうしたことを彼は言葉で説明することはできないかもしれない。しかし内面の明確さから生じるこの核心との触れ合いの確かさは彼自身の生き方から見出すことができる。」

この内面の明確さを誤った価値の魅力に代わるただ一つのものである。問題はそれをいかに見つけ出すかである。

この模索はどのつまりは信仰の世界につながる。宗教だけが信仰ではない。共産主義政権の多くの国々での発展ぶりを見ずとも、共産主義は階級なき社

会をもたらすと信じることはかなり信仰に基づいた行動である。抑圧的な国家が廃止されれば世界は楽園になると信ずるアナキストは正に相当強い信仰をもっているといえる。消費志向の西側の人ですらより多く得ることが人生を満たすものだという信仰をもっている。

マルクスは宗教を人のアヘンだとよんだ。人が世の中の苦しい現実やそれに対処すべき責任からのがれるために宗教を使うのであればこの考えは正しいといえよう。

しかしこれが必ずしも宗教の特徴であろうか？そうではないことを示す人々の生き方がある。信仰から得た力でマハトマ・ガンジーはインドの解放を成し遂げ、ウイルバフォースは奴隷貿易を廃止し、ケア・ハーディは英国の労働運動を起こした。

改訂版 (英語)
Man and Structures
(人と機構)
発売中
定価 800円

(続く)